

# 集

俳句フォーラム

2018年10月 第69号

白山句会

神幸祭

田中藤穂

池広き細川邸跡藤盛り  
青葉若葉胸突坂を登り切る  
先導はパトカー天下祭かな  
古の彩や神幸祭の列  
東京駅屋根黒々と梅雨晴るる

混沌

浦川哲子

投げ入れて椿の白は白のまま  
訃報きく真紅の薔薇が咲きし昼  
夕べより一輪増えし床の百合  
桑の実や旅を好みし妹よ  
文書改竄なる愚行梅雨に入る

日枝御輿

平野無石

御輿ゆく行幸通り松の風  
御輿待つお上りさんも江戸っ子も  
江戸城も町内日枝の御輿ゆく  
歴史たどる勝鬨橋や青嵐  
定まらぬ手術の覚悟梅雨じめり

山王祭

都築繁子

神輿侍つ駅舎と濠をむすぶ道  
王朝の装束銀杏の緑濃し  
猿の山車鳳輦もゆく白昼夢  
神輿ゆく氏子総出の江戸の華  
ビル街の遅き昼餉や山王祭

隅田川

植木やす子

風薫る胸突坂を膝泣かせ  
水脈白く重ねて夏へ隅田川  
館薄暑模型の勝鬨橋開く  
KITTEビル屋上庭園深緑  
笛太鼓行幸通りへ山車入り来

若葉風

工藤はる子

藤の花ゆれて園児の笑ひ声  
五月晴土手にのびのび父子草  
今はもう開かぬ橋や鶉の一羽  
若葉風コーヒーカップの雲も行く  
若葉風阿の狛犬に呑み込まれ

築地

篠田純子

移転間近の市場錆色薄暑なる  
波除神社の獅子に夏越を願いけり  
乗りたしよ橋くぐりゆく遊び舟  
波除神社に真砂女好みの濃あじさい  
バンドネオンの曲うららけし神楽坂

青空

大山夏子

神木の根元に額の花の青  
場外市場抜け来てひそと昼顔や  
神幸祭青空に消ゆ蹄の音  
天下祭鳳輦が過ぐ目の前を  
日の丸似合う東京駅舎風薫る







梅雨

江口九星

思い煩うことなく梅雨の夕陽かな  
十葉の葉葉という母は今はなし  
葉の上のまいまい眺む三世  
枝先の赤々とひろがる夏の夕  
空の青うつす水面や水馬

御苑散策

若泉真樹

苑巡る亀鳴く方へ二往復  
水馬生きて寄り添う物もなく  
囀りや樹上の野良猫大あくび  
自然木の篠懸茂る高々と  
フランス製の擬木やあめんぼう

大夕焼け

渡辺節子

ラバウルの空海燃やす大夕焼け  
火を潜り男衆踊る夏の浜  
一本の古木が紡ぐ花吹雪  
病む夫の手のもどかしく花屑掃く  
花水木夜明の空に願いごと

偕春

大山夏子

玉藻池にさざ波つくる揚羽蝶  
ハンカチの花が降られて春惜しむ  
泰山木の花尊厳が見え隠れ  
松落葉踏みて柔らか来し方を  
通し鴨明治の消えた年齢表

我が道

中川のぼる

木瓜の花寡黙一念通すかな  
椿寿忌や仕草戯けし亡き友の  
憂い断つ都会のなかの夏木立  
万緑のどの道行くも我が道に  
紫蘭咲く世にも稀なる色羨し

宇宙

伊藤昌枝

春惜しむ金婚記念伸び伸びに  
賢治の宇宙見えるや郷の雪割草  
吹かれ翔つ鴉の子らの臆病に  
雨蛙 田の神へ歌 歓喜して  
真桑瓜初挽ぎ供ふ先づ亡父に

五位鷺

楠本和弘

五位鷺の声にひるむや牛蛙  
諍いの是非はさておき茗荷汁  
揚羽舞う大樹の波や列車音  
厨房に里山連れて露の臺  
素足にて渚歩まん啄木忌

燕

吉宇田麻衣

寺壊さる燕何度も戻り来て  
夏の雲旅の行先あちこちと  
明け暮れに笹の葉探し夏の川  
満開の桜病室出でてから  
それぞれに課題乗り切り春の空

甲冑

渡部恭子

甲冑に命預ける山桜  
信念は空へ空へと葱坊主  
時として自由は孤独薔薇乱れ  
生き急ぐ空の青へと薔薇紅  
家系図に新しき名や梅雨青し

自転車

小沢えみ子

念入りに自転車磨き風光る  
威風ある命名薔薇の謂れかな  
ゆすらうめ拾いころがす望郷を  
山梔子の花香り立つ風起ちて  
指先に蜥蜴の敵意残りけり

万葉歌の香り

酒井たかお

念願の揺り椅子デッキに朧月  
春眠や漱石の書と抱き寝かな  
揚げ雲雀われの小畑見えるかな  
夜は星になること願う夏蒲公英  
安らぎの植田に映る万葉歌

円の会

影

石川りゅうし

仰むけの草からぬくみ花の昼  
式済みし母は寄り道菜花摘む  
十歩先の師の影いつもかげろえる  
連翹や灯台へ寄る波と涛  
遠筑波透く正装の鯉のぼり

東御苑

大山夏子

百人番一所百年沈黙緑立つ  
梅坂を七曲りして春暑し  
囀りや松の廊下の一部始終  
二の丸の射干の群生鴉鳴く  
江戸城の石組そびえ春逝かす

母の日

日置游魚

母の日や昭和を生きて子八人  
春愁や筆は重たきものと知る  
春の雪日日自適には程遠く  
春うらら道祖神には招かれず  
夏つばめ未だ見ぬ今年利根悠悠

青空

山田邦彦

花どこも今年早咲き西行忌  
山吹や故無く増える探しもの  
青い空弾けてひびぐしゃぼん玉  
大甕の目高の宇宙青空に  
大南風勝鬨橋を渡り切る

片便り

仁上博恵

積年の錆をまといて花の下  
菜の花を供えて黄泉へ片便り  
雉鳴いて若葉どよめく魔法陣  
死語となる言葉尊とぶ夜の薄暑  
決意などいらぬ鮮やかなる芽吹き

杜若 平野無石

サイケ調バッグ購入春爛漫  
立ち位置を弁えている花水木  
豊潤な時間流れる杜若  
忍冬香る人無き屋敷から  
文学館ズック浴衣の二人連れ

百日紅 重原爽美

音で観る終了となる遠花火  
大花火海を焦がしてとどめ打ち  
するすると天を目掛けて大花火  
百日紅傷も治りて散りにけり  
汚れなき夏川細くダムに着く

桜 松前公園の光善寺で血脈桜を知り 小笠原妙子

血脈てふ桜相承北の旅  
ひとり来て佇む杣の夕桜  
王宮の跡を案内す揚羽蝶  
ヨットの帆珊瑚礁の海の極彩魚  
梅雨湿り財布の底の古コイン

新樹 三羽永治

春雷や仮想通貨の裏おもて  
風光る森の館のマソア像  
瀬の音へ続く小径の新樹かな  
花苔やニンフ居さうな森の奥  
パリパリと糊を剥がして藍浴衣

走る帆 治部少輔

昼一人昨日の柏餅を焼く  
段葛つつじ新たや海の風  
長谷寺や新緑こえて帆が走る  
地鎮祭の祝詞聞こゆる走り梅雨  
紫陽花やはじめて白し夜も白し

馬場の馬 中山未奈藻

白紫陽花時は戻らぬ戻せない  
車線越えの運転荒し雉の声  
満開の花を横目にマリア像  
春光に濡れる鼻先馬場の馬  
ちぐはぐな一日過ぎて新茶飲む